

2. 中津式土器について

前節で述べられているように本遺跡の堅穴群出土土器は阿高式系が主体で、本遺跡では坂の下Ⅰ式後半期～坂の下Ⅱ式にかけて中津式が並行するが、北部九州の中津式を理解するために、瀬戸内地方の中津式を検討する必要があるだろう。そこで中津式とそれと関連する関東地方の称名寺式について若干の考察を行ないたい。なお、資料的制約のため精製深鉢を中心とする。

(a) 研究小史

中津式は、1933年に三森定男氏によって瀬戸内地方の後期初頭に位置づけられた⁽¹⁾。その後、鎌木義昌・木村幹夫氏⁽²⁾、松崎寿和・間壁忠彦氏⁽³⁾らによって、渦文や曲線的な文様を描く磨消縄文土器と沈線文土器、及びヘタナリによる条痕を有する無文土器がセットをなして中津式を構成し、その曲線が入組み化し、3本沈線化することによって福田Ⅱ式（後期前葉後半）が成立すると理解されている。その後、1970年代になって、中津式に類似する関東の後期初頭の称名寺式との関連で、①中津式の伝播によって称名寺式が成立、②称名寺式の伝播によって中津式が成立⁽⁵⁾、③称名寺Ⅰ式は加曾利Ⅳ式の系統を引く土器群と中津Ⅰ式の影響を受けた土器群から成る、という3つの見解が出されており、中津式・称名寺式の成立が問題となっている。そこで、まず関東地方～瀬戸内地方の中期後葉の様相を概観し、次に称名寺式・中津式について検討した上で、九州の中津式について触れたい。なお小稿では便宜上、中津式を東海地方以西の土器様式として論を進める。

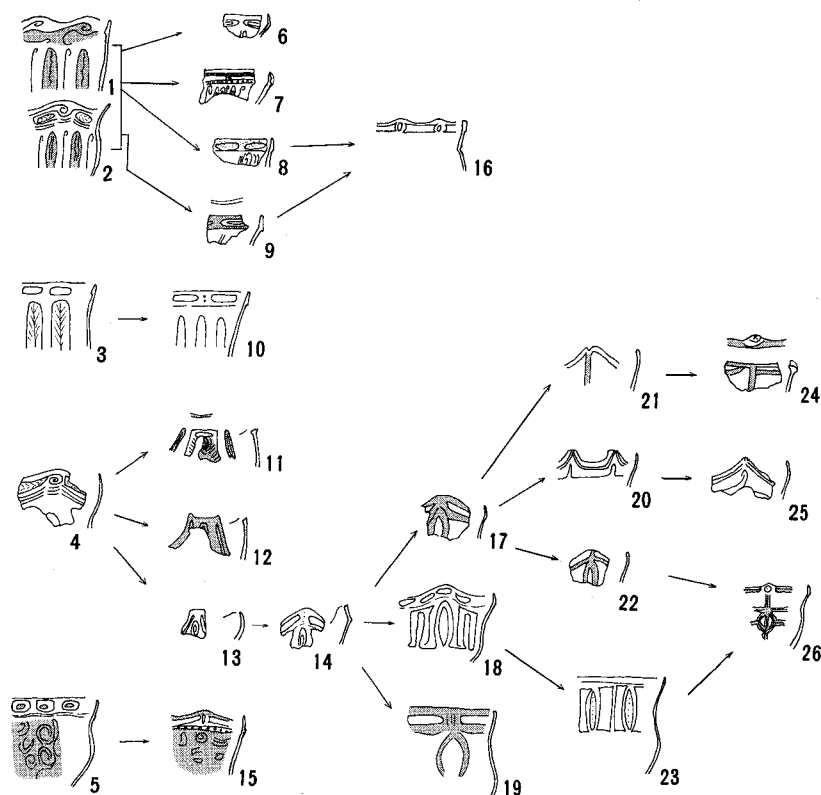
(b) 中期後葉の様相

関東地方から東海地方東部では、中期後葉～末にかけて、加曾利Ⅱ式→Ⅲ式→Ⅳ式が存在するとされており⁽⁷⁾、東海地方西部では細分が進んでいるが、文様等から判断して、ほぼ中富式・(咲畑式)・神明式を加曾利Ⅱ式併行、取組式・島崎Ⅲ式・山の神式を広義の加曾利Ⅲ式と考えることができる。

ところで、東海地方西部～近畿地方にかけて、第ⅰ図6～13に示すような土器群が分布する。文様に着目すると、7・8は口縁部に杵状のモチーフを有し、胴部は長楕円文と蕨手文の組合せであることから、1・2との関連が窺える。6・9も7・8同様、口縁部に杵状のモチーフを有し、6の口縁部文様帯作出法（屈曲）が7と共通し、9の口縁部文様帯作出法（肥厚）が8と共通することから、6・9を7・8と同一群とみなせよう。10についても同様の理由で6～9と同一群とすることができ、文様論的には3との関連が知られる。この一群は三重県鈴鹿市東庄内B遺跡⁽⁹⁾、愛知県知多郡南知多町林ノ峰貝塚⁽¹⁰⁾、岐阜県恵那郡坂下町門垣戸遺跡⁽¹¹⁾、京都市京大農学部遺跡⁽¹²⁾、鳥取市桂見遺跡⁽¹³⁾などで出土している。

11～13は方柱状の山形口縁を有し、文様に着目すると、渦文・同心円文と杵状モチーフの組

合せであることから、これらを同一群とみなすことができ、文様論的には4との間に関連性が認められる。この一群は三重県東庄内B遺跡、岐阜県不破郡関ヶ原町中野遺跡⁽¹⁴⁾、揖斐郡徳山村宮ヶ原遺跡⁽¹⁵⁾、京都市京大農学部遺跡、鳥取市桂見遺跡で出土しており、東海地方西部～近畿地方、



第1図

および鳥取県の東部まで分布し、既述の6～10の土器群の分布範囲とはほぼ一致する。

ところで、1～4は東海地方の島崎Ⅲ式・山の神式に比定でき、既述したように広義の加曽利EⅢ式と考えられることから、仮に7・8→1・2、10→3、11～13→4という方向性を想定すると、7・8・10・11～13は加曽利EⅡ式併行ということになるが、加曽利EⅡ式ないし、併行様式の器形・文様構成とは大きく異なることから、この方向性は想定し難い。一方、この両群を出土した三重県東庄内B遺跡では中津式は出土せず、東庄内A遺跡ではその逆の状況が見られることを考慮すると、これらを加曽利EⅢ式に後続する中期末の土器群として把握できよう。

さて、14については、器形は異なるものの、文様論的には13→14という変化が窺える。さらに、14の口縁部文様帯作出法が6・7と共通することから同じく中期末に位置づけられ、15は文様論的には5（加曽利EⅢ式併行の曾利式）の系統を引くと考えられるもので、口縁部文様帯作出法は異なるものの、口縁部モチーフの共通性から、同じく中期末に位置づけることができよう。

以上述べてきたように、中期末に位置づけることのできる一群を「平式」⁽¹⁷⁾とすると、いずれも加曽利EⅢ式ないし、それに併行する曾利式の系統を引くもので、東海地方西部～近畿地方

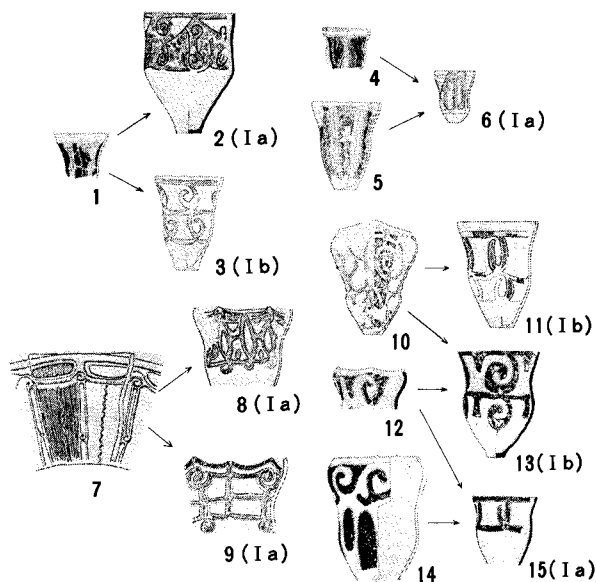
に分布することが知られる。ところで、東瀬戸内地方～近畿地方では中期後葉に里木Ⅱ式が主体的に分布するが、里木Ⅱ式に先行する船元Ⅳ式に加曾利ⅤⅡ式の影響が認められるとされること⁽¹⁸⁾から、里木Ⅱ式を加曾利ⅤⅢ式併行と考えることができる。一方、里木Ⅱ式から平式への型式変化は考え難いことから、加曾利ⅤⅢ式を祖形とする平式は東海地方西部で成立し、近畿地方へ伝播したものともみなせよう。また、東瀬戸内では里木Ⅱ式の地文の撚糸文を貝殻条痕に置換した里木Ⅲ式が中期終末に位置づけられているが、文様構成など、里木Ⅲ式、および、西瀬戸内の中期後葉～末に位置づけられる福田Ⅲ式と後続の中津式との間に共通する要素がほとんど見られないのである。

さて今村啓爾氏は称名寺Ⅰ式を、加曾利ⅤⅣ式の系統を引く一群と、その系統を引かない一群とに分離し、前者をb類、後者をa類として、a類を中津式の影響によって成立したものと考えておられるが、上述のように、近畿以西で中津式が成立した可能性は小さい。そこで、称名寺式・中津式の検討を行ない、それを踏まえた上でその成立について考えたい。

(c) 中津式・称名寺式について

まず、中津式の主要文様要素の1つである0字文について検討する。(第i図)

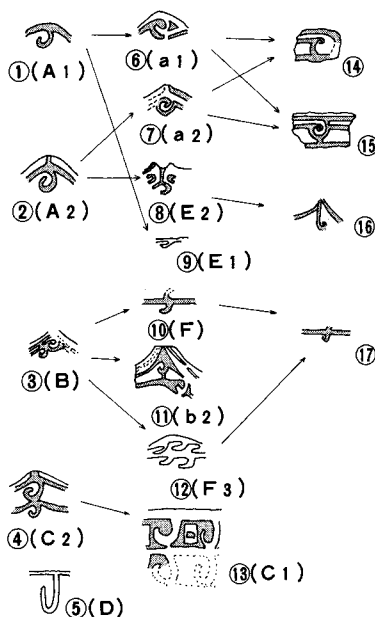
- 17 杵状のモチーフと0字文の組合せ
- 18 杵状のモチーフと0字文の組合せだが、口縁部文様と胴部文様が区別されている。
- 19 杵状のモチーフと下端が開いた0字文を組合



第ii図 註(6), (7)文献より転載

表 ii

		関 東	東 海	近 畿	瀬戸内 東 西	東～北九州
第Ⅰ段階	17				○	
	18				○	
	19		○			
第Ⅱ段階	22				○	
	23				○	
	20				○	○
	21				○	○



第iii図

わせたもの

20 「ハ」の字状の沈線間に突起状のモチーフを有するもの

21 20の突起状のモチーフがベルト状になっているもの

22 17に類似するが、枠状のモチーフが見られないもの

23 18に類似するが、枠状のモチーフが見られないもの

さて、20は17のネガティブな部分をポジティブな文様としていることから、17↔20という関係が想定でき、同様の理由で17↔21も成り立つ。22と17の差違は枠状のモチーフの有無であることから、17↔22

という関係が成立し、同様の理由で18・19↔23という関係を想定できよう。

ここで瀬戸内地方で中津式に後続する福田KⅡ式のモチーフ（24～26）との関連で考えると、20→25、22・23→26、21→24という関係を想定できることから、17→20～22、18・19→23という方向性が成り立つ。一方、口縁部文様帯を作出せず、枠状のモチーフで、口縁部文様帯を表現するという共通性から、17～19を同一段階とし、枠状モチーフをもたないという点で、20～23を同一段階とし得ることから、前者を第Ⅰ段階、後者を第Ⅱ段階としたい。なお、17～19は平式の14にその祖形を求めることができよう。²²⁾各モチーフの分布は表iiに示すとおりであり、0字文はほぼ瀬戸内以西に分布するが、第Ⅰ段階のモチーフは西瀬戸内にはみられないようである。

このようにみてくると、平式から中津式の0字文は成立するが、渦文は成立し得ないようであり、東瀬戸内の里木Ⅲ式、西瀬戸内の福田C式を祖形として中津式が成立したとも考え難いことは既述したとおりである。よって、中津式の渦文が称名寺式の影響によって成立した可能性が大きくなることから、今村氏の称名寺Ⅰ式a—b類²³⁾について若干の検討を行ないたい。

(第ii図1～15)

称名寺Ⅰ式a類の文様を構成する要素は、J字文、渦文（1段・2段）、枠状文（縦に展開するもの・横に展開するもの）、ベルト状文などである。このうち、J字文と1段の渦文以外の要素は加曾利EⅣ式（12・14）には見られない。²⁴⁾しかしながら、これらの要素は加曾利EⅣ式に先行するとされる加曾利EⅢ式あるいは曾利Ⅲ式（1・4・5・7・10）に認められるのである。まず2段渦文の1→2は明らかで、1のネガティブな文様部分をポジティブな文様としているのが3であることから1→3も成り立つ。6は4と5の要素を合わせもっていることか

表 iii

		関東	東海	近畿	瀬戸内 東 西	東～北九州	
第 1 段 階	A ₁	○(?)		○			第iii図①
	A ₂	○	○	○	○		" ②
	B	○	○		○		" ③
	C ₂		○	○(?)			" ④
	C ₃	○					
	D ₁	○					" ⑤
	D ₂		○				
	D ₃		○				
	a ₁		○		○		" ⑥
	a ₂			○	○		" ⑦
第 2 段 階	b ₂				○		" ⑪
	c ₁	○		○			" ⑬
	E ₁			○	○		" ⑨
	E ₂				○	○	" ⑧
	F ₃				○		" ⑫
	F				○		" ⑩

ら、4・5→6が想定でき、7の杵状モチーフと活文を結合すると、9のモチーフが成立する
と考えられる。7→8、12・14→15は容易に理解できよう。なお、今村氏が加曽利EⅣ式系と
される11・13のような2段渦文も10の系統を引く可能性がある。

このようにみえてくると、称名寺Ⅰ式(a・b類)は関東で成立し、西日本へ伝播した可能性²⁵⁾
が強く、このことは、関東地方で中期の阿玉台式～加曽利E式期に盛行した土器片錘、および
加曽利E式期に関東地方にみられる切目石錘A種が後期初頭に近畿地方(三重県東庄内A遺跡、
京大農学部遺跡)に伝播したとする渡辺誠氏の指摘と矛盾するものではない。²⁶⁾

次に、中津式の渦文を分析することによって、さらに検討を進めたい。ここでは、形状によ
って分類し、それと垂下の方法を組み合わせることとする。

○形状

- A. 大形で巻き込みの大きい渦文
- B. 上下に展開する渦文
- C. Aと同様の渦文が縦に2段施されるもの
- D. J字文
- E. Aに比べると、巻き込みが小さく、鍵手状のもの
- F. Bと同様に上下に展開する鍵手状のもの

さらに、A、B、Cの縄文部と無文部を反転したものを各々a、b、cとする。

○垂下の状態

- 1. 口縁部から直接垂下する。
- 2. 渦文を沈線を用いて口縁端に結合する。
- 3. 口縁部付近を無文帯にして、その下に渦文を施す。

両者を組み合わせたものが第iii図である。

さて、瀬戸内地方で中津式に後続するのは3本沈線の巾狭の磨消縄文帯を有する福田KⅡ式
であるが、瀬戸内西部には、2本沈線で巾広の磨消縄文帯を有する「宿毛式」が分布してい
る。両者の関係については、中津式→宿毛式→福田KⅡ式とする見解²⁷⁾と両者を同時併存とする見
解がある。宿毛式が主体を占める四国西南部に福田KⅡ式が多くないことや広島県福山市洗谷貝
塚²⁸⁾における出土状況を考慮すると、宿毛式と福田KⅡ式²⁹⁾が併存したと考える方が妥当であろう。³⁰⁾

以上のことを踏まえて、渦文と関連する福田KⅡ式のモチーフを示したのが第iii図⑭～⑰であ
る。⑭・⑮は、①・②の縄文部と無文部を反転し、沈線を入組化したものとみなせる。よって、
⑭・⑮は⑥・⑦を媒介として、①・②にその組形を求めることができよう。⑰は縄文部と無文
部を反転することなく、ポジティブな部分を維持して入組文化している。⑰の形状は③より⑩
・⑫に類似し、⑩・⑫→⑰が考えられるが、③→⑰の可能性もある。ところで、③は波頂部を
無文にするという点で、第ii図9(称名寺Ⅰ式a類)の口縁部モチーフと共通し、その分布は

表iiiに示すように瀬戸内～関東地方に見られることから、相対的に古い段階に位置づけることができよう。よって、③→⑩・⑫→⑬が想定できるのであり、③の位置づけについては、古段階に位置づけられる②が同様に瀬戸内～関東地方に分布することと矛盾するものではない。さて③のポジとネガを反転することによって、⑪が成立することから③→⑪も想定できる。④についても、称名寺Ⅰ式b類に類似し、関東～近畿地方に分布することから、古段階に位置づけることができ、ポジとネガの反転によって、④→⑬が想定できよう。⑧・⑨の形状は⑩・⑫に類似することから、⑧・⑨を⑩・⑫と同一段階に、⑤については、称名寺Ⅰ式a類に類似し、関東～東海地方にかけて分布することから、古段階に位置づけることができよう。以上のことから、①～⑤を第Ⅰ段階、⑥～⑬を第Ⅱ段階のモチーフとみなす事ができ、その分布は表iiiに示すとおりである。表iiiから、第Ⅰ段階のモチーフが瀬戸内～関東地方にかけて分布するものの、関東～東海地方を中心とし、第Ⅱ段階では近畿～瀬戸内地方と東海地方以东で異なる様相を呈していることが看取できよう。³¹⁾

ところで、瀬戸内地方では岡山県吉備郡昭和町日羽ケンギョウ田遺跡³²⁾で、渦文の第Ⅰ段階と0字文の第Ⅰ段階が主体を占め、広島県福山市洗谷貝塚³³⁾で、渦文の第Ⅱ段階と0字文の第Ⅱ段階が主体を占めることから、渦文の第Ⅰ段階と0字文の第Ⅰ段階、渦文の第Ⅱ段階と0字文の第Ⅱ段階は、各々ほぼ同時期と考えられる。さて、ここで既述したように渦文に関して、近畿地方を境にして、第Ⅱ段階の様相が異なること、及び0字文の分布がほぼ瀬戸内地方に限られることから、関東～近畿地方と瀬戸内地方の間に差異が認められる。そこで、次に半精製土器、粗製土器について検討したい。

今村氏に依ると、称名寺Ⅰ式a類³⁴⁾には、縄文を縦に間隔をあけて加えた半精製土器が伴ない、また、称名寺式には櫛状施文具による条痕を有する粗製土器が伴なうという。前者は三重県鈴鹿市東庄内A・B遺跡³⁵⁾、滋賀県大津市滋賀里遺跡³⁶⁾、奈良県天理市布留遺跡³⁷⁾、京都市京大農学部遺跡³⁸⁾、大阪府馬場川遺跡³⁹⁾0地点で出土している。後者は、三重県東庄内A・B遺跡、奈良県布留遺跡、鳥取市桂見遺跡⁴⁰⁾などで出土している。これに対して瀬戸内地方の中津式に伴う粗製土器は二枚貝・小巻貝による条痕を有する土器で、半精製土器も称名寺式のそれとは異なっている。このように精製・半精製・粗製の各レベルで、関東～近畿地方と瀬戸内地方以西の間に差違が見られることから、ここで改めて、関東～近畿地方では称名寺式、瀬戸内地方以西では中津式としたい。

そこで、瀬戸内地方における渦文の第Ⅰ段階と0字文の第Ⅰ段階を中津Ⅰ式、渦文の第Ⅱ段階と0字文の第Ⅱ段階を中津Ⅱ式とすると、その型式変化の特徴として、杵状モチーフの消失、直線化、渦文の萎縮、縄文部と無文部の反転などが挙げられよう。中津Ⅱ式は福田KⅡ式へと型式変化するが、京都府京大植物園内縄文遺跡⁴¹⁾では福田KⅡ式・縁帯文土器・堀之内Ⅰ・Ⅱ式が併行することが確認されていることから、今村氏の称名寺Ⅰ式c類・Ⅱ式が中津Ⅱ式に併行

ると考えられる。

称名寺Ⅰ式の型式変化は、渦文の縄文部と無文部の反転を基本としているようで、中津Ⅰ式の型式変化との間に共通性が認められるものの、既述したように称名寺Ⅰ式c類・Ⅱ式と中津Ⅱ式のモチーフの差違は大きい。このことは、中津Ⅰ式の成立段階に関東～東海地方に向って開いていたコミュニケーション・システムが⁽⁴²⁾、中津Ⅱ式期にはある程度閉じ、一方、西に向って、より開いていたことが表iiiから窺えよう。⁽⁴³⁾また、福田Ⅱ式に縁帯文の影響がみられる（第ⅰ図26）ことから、福田Ⅱ式期のある段階には、再びコミュニケーション・システムが東に向ってある程度開いていたものと考えられる。

最後に北部九州の中津式について検討したい。

北部九州では福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚⁽⁴⁴⁾、福岡市桑原飛櫛貝塚⁽⁴⁵⁾、福岡県鞍手郡鞍手町新延貝塚⁽⁴⁶⁾、本遺跡、佐賀県西松浦郡西有田町坂の下遺跡⁽⁴⁷⁾等で中津式が出土している。資料が断片的であるが、渦文の形状、文様の直線化が見られること等から判断して、ほぼ中津Ⅱ式に比定できよう。一方、前節で述べられているように、北部九州の中津式は坂の下Ⅰ式後半期から坂の下Ⅱ式に伴うようである。

さて、天神山貝塚⁽⁴⁸⁾では中津Ⅱ式の精製土器と小巻貝による条痕を有する粗製土器がセットをなすのに対し、阿高式系土器は半精製土器とされる凹点文土器⁽⁴⁹⁾と粗製土器であり、中津式の優位が看取できる。桑原飛櫛貝塚⁽⁵⁰⁾、新延貝塚⁽⁵¹⁾でも同様の状況である。一方、本遺跡でも中津Ⅱ式の精製土器と粗製土器がセットをなしているが、主体を占めるのは阿高式系である。以上から、中津式の精製土器と粗製土器を出土しても、中津式が、a₁主体を占めない場合、a₂主体を占める場合があるようである。一方、地理的に西の方にある坂の下遺跡⁽⁵²⁾では中津式の精製土器が客体として存在している。異系統の中津Ⅱ式が伝播した段階で、精製土器と粗製土器がセットをなしていることから、この伝播がある程度の人の移動を伴うものであったことが考えられ、先に述べたa₁、a₂は外来集団が在来集団に対して優位を占めて行く過程を示すものと言えるかもしれない。

この状況は既述したように、瀬戸内地方に称名寺Ⅰ式（a・b類）が伝播した際の状況とは対照的であり、この現象の背景の究明などの問題は今後の課題としたい。

小稿を草するにあたり、以下に記す諸先生・諸氏にいろいろな御配慮、並びに貴重な御指導・御教示を賜った。末筆ながら深甚の謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

岡崎敬、木村幾多郎、杉村幸一、田中良之、西健一郎、西谷正、松永幸男、宮内克己、
横山浩一（1983.3.7）（沢下孝信）

註

- (1) 三森定男「先史時代の西部日本」『人類学・先史学講座』第8巻1933
- (2) 鎌木義昌・木村幹夫「中国地方の縄文式土器」『日本考古学講座』3 1956
- (3) 松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化・西日本」『新版考古学講座』3 1969
- (4) 安孫子昭二「縄文時代後期初頭の諸問題」『平尾遺跡調査報告』I 1971
- (5) 下村克彦「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』12 1974
- (6) 今村啓爾「称名寺式土器の研究(上・下)」『考古学雑誌』63-1.2 1977
- (7) 小稿での加曾利E式の編年は鈴木保彦他「縄文時代中期後半の諸問題〜土器資料集成図集」『神奈川考古』10 1980に依る。
- (8) 紅村弘「縄文中期文化」『東海先史文化の諸段階一本文編・補足改訂版』1981
- (9) 小玉道明「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」1 1970
- (10) 山下勝年「愛知県南知多町内海林ノ峰貝塚試掘概報」『古代学研究』77 1975
- (11) 紅村引他「岐阜県坂下町門垣戸遺跡調査報告」1976
- (12) 中村徹也「京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要」II 1975
- (13) 小杉宗雄他「桂見遺跡発掘調査報告書」1978
- (14) 大参義一他「岐阜県史」(通史編原始)1972
- (15) 小沢一弘「美濃徳山村宮ヶ原遺跡の縄文時代遺物」『古代文化』27-10 1975
- (16) 註(9)に同じ
- (17) 堅田直氏の平CⅢ式、平KⅠ式を含む。堅田直「平遺跡」『帝塚山大学考古学研究室考古学シリーズ』1 1966
- (18) 間壁忠彦「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7 1971によると「加曾利E式古段階」とされるが、EⅡ式とみなせる。
- (19) 註(18) 文献
- (20) 田中良之「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』1980
- (21) 註(6) 文献
- (22) 16のモチーフ自体は8〜10に類似し、肥厚によって口縁部文様帯が作出されていることから、平式と考えられるが、岡山県ケンギョウ田遺跡で中津式に伴って出土したことから後期初頭に位置づけることができよう。間壁忠彦「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田遺跡」『倉敷考古館研究集報』3 1967
- (23) 註(6) 文献
- (24) 今村氏は2段の渦文も加曾利EⅣ式の系統を引くとされているが、文様論的にはヒアタスが大いようである。
- (25) 文様論的には称名寺Ⅰ式は加曾利EⅢ・曾利Ⅲ式と加曾利EⅣ式の要素を含むことから加曾利EⅢ・曾利Ⅲ式と加曾利EⅣ式が同時併存した可能性があり、すでに堀越正行氏によって加曾利EⅣ式をEⅢ式に含める見解が出されている。しかしながら加曾利EⅢ式とEⅣ式を検討することは小稿の目的ではないので、今後の課題としておきたい。堀越正行「加曾利EⅢ式土器研究史」『信濃』24-2.3.4 1972
- (26) 渡辺誠「縄文時代の漁業」1973
- (27) 木村剛郎「高知県梶原の縄文遺跡と遺物」『土佐考古学叢書』1 1978
- (28) 田中良之・松永幸男「後期土器について」『萩台地の遺跡』IV 1981
- (29) 註(27) 文献
- (30) 福山市教育委員会『洗谷貝塚』1976
- (31) 註(6)によると、称名寺Ⅰ式a・b類→Ⅰ式c類への型式変化はポジ・ネガの反転であり、その点では近畿〜瀬戸内における型式変化と共通するが、その結果、成立したモチーフは近畿〜瀬戸内地方に比べてヴァリエーションに富み、異なる様相を呈する。
- (32) 註(22) 文献
- (33) 註(30) 文献
- (34) 註(6) 文献
- (35) 註(9) 文献
- (36) 田辺昭三「湖西線関係遺跡調査報告書」1973
- (37) 小島俊次「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯1958
- (38) 註(12) 文献
- (39) 下村晴文「馬場川遺跡発掘調査概要」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』IV 1976
- (40) 註(13)に同じ
- (41) 中村徹也「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要」1974
- (42) 上野佳也氏によると「土器型式圏は…土器文様の情報の流れにのって成立する」のであり、その流れを維持するものが婚姻と交易ということになる。即ち土器分布圏は、ある土器型式に関する情報の流れを共有しているコミュニケーション・システムと言えよう。上野佳也「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44-4 1980
- (43) 先に関東〜近畿地方までは称名寺式としたが、表iiのように中津Ⅱ式が近畿地方にも存在することから、近畿地方では、称名寺Ⅰc・Ⅱ式と中津Ⅱ式が混在していたものと考えられる。
- (44) 前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」1974
- (45) 小池史哲「糸島の縄文文化」『三雲遺跡』II 1981
- (46) 木村幾多郎他「新延貝塚」1980
- (47) 森醇一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究書』第2集 1975
- (48) 註(44) 文献
- (49) 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6 1979
- (50) 註(45) 文献
- (51) 註(46) 文献
- (52) 註(47) 文献